

国際理解教育論

社会科教育・寿 卓三

I 受講状況（アンケートへの回答数）

国際理解コース 11名 その他 13名

II 授業アンケートの結果

問1 出席状況 (a>b>c>d>e)

a 10 b 7 c 3 d 4 e 0

問2 授業への取り組み

a 1 b 11 c 11 d 1 e 0

問3 授業のテーマ・目的の明確さ

a 2 b 11 c 7 d 4 e 0

問4 国際理解に関する理論的考察の是非

a 4 b 12 c 6 d 2 e 0

問5 他の大学教員による講義

a 4 b 12 c 6 d 2 e 0

問6 ゲストスピーカーによる講義の是非

a 15 b 7 c 2 d 0 e 0

問7 寿の熱意、工夫

a 9 b 13 c 2 d 0 e 0

問8 授業の内容、レベル

a 3 b 11 c 6 d 3 e 1

問9 あらたに考え方が培われたか

a 9 b 14 c 1 d 0 e 0

問10 「国際理解教育」の講義として妥当か

a 2 b 14 c 6 d 2 e 0

問11 日本語教師の資格取得に有意義か

a 4 b 10 c 8 d 1 e 0

問13 この講義のお薦め度は

a 1 b 10 c 10 d 1 e 1

問14 よかった点、改善すべき点

1) 最初から問題が多かったのでバタバタしていつのまにか終わってしまった気がするのでもっとじっくり受講したかったです。

2) 内容がとてもアバウトだったので、もっとわかりあってもよかったです。

3) 形として残るような結果(この授業を受けての)があれば良かったと思う。必要な用語とか。

III 授業評価を受けて

この講義は、不安感、閉塞感が広がる中、市場原理主義的なグローバリズムと共同体の復古的な統合を志向するナショナリズムとが相補性体系をして均質化・同質化を強める状況下において、国際理解教

育はどのような意味と役割を担うべきなのか、という問題意識に基づいている。そこで、私たちのコミュニケーション行為を考察し、文化の多元性に立脚しつつも共生可能なあり方を追求する国際理解教育のあり方を原理的、具体的に考察することを目指した。そこで、〈I 国際理解について原理的に考える段階〉、〈II 国際理解教育の現実：学校現場と国際理解の現場〉、〈III 国際理解教育の指導計画の作成〉という3つのレベルを設け、いずれの段階においても、学生相互、学生と教員との対質ということを意図した仕掛けを試みた。というのも、「私の問題はみんなが考えるべき問題だ」が、「みんなの問題は、私以外のみんなが責任を持って対応すべきであって、私の問題ではない。」という傾向が強まりつつあり、大学教育もまたこの現実の前にその無力さを露呈しているのではないかと考えるからである。私の問題と私たちの問題との往還を意識的に講義に取り込んで、学生の思考力、問題発見・問題解決能力の涵養にと努めない限り、異質なものと共生を志向する国際理解教育はもとより、そもそも専門知識も授業技術も無用の長物に過ぎないように私には思えるからである。

しかしながら、この講義の実際の成果はアンケートの問14の学生コメントが示すように極めてあやしいものである。そこには、寿の出張等で予定された回数の講義ができず、また補講ができなかったなどの「外的な要因」があったことも事実だが、しかし問題はもっと根源なことではなかろうか。学生の現実に切り込み、彼らが切実感をもつような問題を提起し、そのような問題に他の学生や教師と対話しつつ意欲的にかかわろうとするモチベーションをいかに持続させるか。そして、このような学習方法論を、教員の専門、講義の内容の質の高さといかに両立させるか。学生の成績評価が、単に評価方法の客観性・信頼性ということだけに終始するのではなく、学生の問題発見能力の涵養ということと結びつけて考えられるべきだとすれば、私たちはこのような難問に直面することになるのではなかろうか。この飛び込みの講義は改めてそのような感を強くするものであった。